■平成 29 年度春の総会の開催(6/30)

□平成 29 年 6 月 30 日(金)13 時 10 分より

□高知会館

□参加者数

第一部　総会　65 名

第二部　技術士二次試験合格者祝賀会及び講演会　68 名

第三部　祝賀会　50 名

本年度は、第一部の総会開催後、第二部では(公社)日本技術士会四国本部との共催により技術士二次試験合格者祝賀会と講演会を開催した。また、第三部として祝賀会が行われた。

□　第一部　総会

第一部の総会は、山本副代表幹事の司会により、右城代表幹事の挨拶で始まり、その中で日本技術士会四国本部高知支部の秋の設立に向けて準備中である旨のお話があった。続いて、右城代表幹事が議長となり、明坂事務局長より平成 28 年度事業報告と収支決算報告、岡田監事より監査報告が行われ、満場一致で承認された。

また、平成 29 年度事業計画案、収支予算案についても満場一致で承認・可決された。

右城代表幹事の挨拶

続いて、新入会員 5 名（技術士)、横山貴博[建設・総合技術監理部門-道路・都市および地方計画、㈱エイト日本技術開発高知支店]、山本亮輔[建設部門-土質および基礎、㈱地研]、船井孝誠[建設部門-土質および基礎、㈱相愛]、大西誠一[建設部門-道路、㈱ﾛｲﾔﾙｺﾝｻﾙﾀﾝﾄ]、野村國勝[建設部門-鋼構造およびコンクリート、㈱アンプル]、このうち、出席された山本会員、大西会員、船井会員が自己紹介を行った。

□　第二部　技術士二次試験合格者祝賀会及び講演会

技術士二次試験合格者祝賀会及び講演会は、河野幹事の司会により、右城代表幹事（四国本部副本部長）の挨拶で始まり、その中で徳島県技術士会が 50 周年を迎えること、また、トピックスとして、右城代表幹事が日本技術士会の理事に選出されたこと、明坂事務局長がフェロー会員に認定されたこと、与党技術士議員連盟が設立されたこと等のお話があった。

次に事業委員の小川幹事より、四国本部の紹介があり、その後、小川幹事より新規合格者 4 名、山本亮輔[建設部門-土質および基礎、㈱地研]、船井孝誠[建設部門-土質および基礎、㈱相愛]、大西誠一[建設部門-道路、㈱ﾛｲﾔﾙｺﾝｻﾙﾀﾝﾄ]、森下正浩[建設部門-道路、高知県土木部安芸土木事務所]が紹介され、出席した山本会員、大西会員、船井会員が自己紹介を行った。

続いて、青年技術士交流会委員の片岡会員より、青年技術士交流会についての説明及び活動報告が行われた。

小川幹事による四国本部の紹介

合格者による自己紹介の様子

片岡会員による青年技術士交流会の活動報告

1）ビデオ鑑賞－「黒部ダム難工事の記録」

「黒部ダム難工事の記録」として、トンネルの 1/4 が高熱温泉帯を通る工事のビデオを鑑賞した。

高熱温泉帯は摂氏 160℃を超えるため、黒部川から引いた水や風を送り続け、作業場の環境を 37℃以下に保つ必要があったこと、また、高熱温泉帯での発破のセットは、セット中に爆発をしないように細心の注意を払う必要があったこと等その過酷さが伝わってきた。また、この発破により振動している休憩場の映像には、その凄さが感じられた。この工事のために摂氏 140℃に耐えられる爆薬も開発された。また、過酷な労働条件のために作業員の定期的な健康診断も行われていた。

トンネルは、貫通までに工事着工から１年を要した。また、貫通後のコンクリートの巻きたてには、高熱温泉帯であることから、発生する水和熱の低い中庸熱ポルトランドセメントやフライアッシュセメントが使われていた。

この厳しく過酷な条件に立ち向かうための開発やいろんな工夫に取組む姿から、作業に携わる人たちの“この仕事を絶対に完遂するんだという強い情熱”が伝わってきた。

ビデオ鑑賞の様子

1)講演会Ｉ－「博物館の仕事～学芸員の技～」高知城歴史博物館　渡部 淳館長

渡部館長からは、博物館には、資料の保存・調査研究・展示・公開するという４つの使命があり、その中で学芸員の仕事である資料を保存し次世代に伝えること、資料の意味や価値を見出し伝えることについてお話しいただいた。

資料の保存においては、温度・湿度・光・大気の環境を整えることが大事であり、資料の材質ごとに細かく管理する必要があること。光について、赤外線は温度を上げ、紫外線はものを壊すためカットをすること。劣化を防ぐため 1 日に当てられる照度が材質ごとに決められていること。また、お客さんが運んでくる空気にも注意を払うことなどその大変さが伝わってきた。

資料の修理の考え方は、修復ではなく修理を行う、つまり、元に戻すのではなくこれ以上壊れないようにすること。また、材質や技術を徹底的に分析し、その時代に使用していたものを使い修理する。例えば、絹ついては江戸時代のものであればその時代の蚕を飼

い、絹を作ることには驚いた。

古文書の漢字にはくずし字が多く、学芸員はまずくずし字を読むため、くずし字の辞書があり、それを習得する必要があった。“様”という漢字には、70 個ものくずし字があることには驚いたし、また、簡略化したくずし字ほど身分の低い人宛の書状とのことであった。

仮名文字では、例えば、“き”をとってもいろんな“き”があること、散らし書きという順番がバラバラに書くものがあることについても驚いた。

書状の紙についても、大きくて厚く白いものが権力者であること表し、また、紙が小さいほどどうでもよい人宛であること。また、差出人の記載の仕方についても、簡略化すればするほど身分の低い人宛になること。もうひとつ驚いたのは、様と殿の使い方で、様が身分の上か同等の人に、殿が身分の低い人に使うということで、逆に思っていたことである。

高知城歴史博物館の収蔵庫は、西日本トップレベルである。また、年間 10 万人の来館を目標にしていたが、3 月オープンで 6 月末までに既に 9 万人も訪れているとのこと。

渡部館長のお話を伺い、資料の保存の大変さ、学芸員の保存技術や知識の習得の大変さを知ることができたことと、古文書の書き方やくずし字等について、驚きの連続で大変興味深く、有意義な時間を過ごすことができた。

高知城歴史博物館　渡部館長

3)講演会Ⅱ－「技術士オリジナルの武器を持とう～「知っちゅう」を「備えちゅう」に変えるために～」高知大学地域協働学部　大槻知史准教授

大槻准教授からは、技術士が持っている専門性を防災にどう生かすかについてお話しいただいた。

防災は「知っちゅう」を「備えちゅう」に変えることが大事であり、そのためにはきっかけ・働きかけが必要である。防災活動に参加・協力させるためには、内容を理解させ、心を動かさせることが大事である。

大槻准教授は、持続的なコミュニティ防災の 5 つポイント“FEICE（フェイス）”を大切にして活動しているとのこと。Flow(「知る」、「気づく」、「備える」の一連の流れで設計)・Easy（カンタンにできるプログラム）・Imagination（想像させる機会を提供し、意思決定力をつける）・Combined（普段の活動と組み合わせて防災活動を展開)・Enjoyable（楽しく、参加しやすい活動）の 5 つポイントである。

大槻准教授は、技術士の専門性をいかにやさしく、楽しく地域に伝えていくかが大事であると語り、自ら学生と一緒に取組んでいる実例等を紹介していただいた。

押しかけミニ講演として、地域に出向いて行き、防災紙芝居を見せ、その場で実際に備える体験をさせたり、防災袋だけを配り 1 ヶ月後に防災袋の自慢大会を開催し、楽しさを加え活動を行っている。また、家具の固定の勉強会では専門家に家具の固定を実践してもらい、参加者にも体験してもらうとともに器具の即売会を実施した例。

防災の基礎知識を「あいうえお」で心に残す取組みとして、防災袋に必要なものを「た（たべもの)・ち（治療薬)・づ（水)・で（電気)・と（ほっと防寒)」で記憶したり、防災カルタを作ったりしている例。

小中学校と連携して、生徒同士で自分の部

屋を安全にするプランを考え家族と計画を実行したり、津波で高台に避難する時の問題点を議論させ問題点をクリアするための対策を考え大人に伝える取組。

また、普段はベンチ、お祭りの時はカツオのたたきを作れ、被災時には炊き出しの場となるカマドベンチを設置することにより、普段から使っていることから、いつでも使えるようになっている例。

避難所運営計画づくりとして、避難所で何が起こるのか机上で考え、実際に体験し、必要な準備、ルール、備蓄を決めていき、最後に飲み会を行って参加者の懇親を図っていく取組。

住宅地図で「逃げ地図」の作成、段ボールで防災ジオラマの作成、地域住民による避難道の整備に対する支援、ドローンの空撮体験による地域の再発見、土木現場の知恵を活かした子ども防災キャンプの開催等の取組についても、技術士の専門知識をわかりやすく楽しく伝えていくことが必要である。

大槻准教授のお話を伺い、私たち専門家が持っている知識やスキルをいかにわかりやすく楽しく伝えていくことがオリジナルな武器をなるし、また、それを実践していくことが社会貢献に繋がっていくことをあらためて感じた。

高知大学地域協働学部　大槻准教授

□　第三部　祝賀会

祝賀会は、山本副代表幹事の挨拶・乾杯で始まり、合格者や会員同士の懇親を深め、森幹事の中締めにより閉会した。

山本副代表幹事による挨拶・乾杯

祝賀会の様子

森幹事による中締め